

人生短期大學

高橋義孝

文藝春秋新社

高橋義孝

人生短期大學

人生短期大学

著者 高橋義孝
たかはしよしたか

発行者 車谷弘

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

振替東京七七八四三番

本文印刷理想社

色印刷半七写真

製本 矢嶋製本

昭和三十五年九月十五日印刷

昭和三十五年九月二十日発行

定価二五〇円



人生短期大学 目次

女はワンピースである	九
男は女のアクセサリ―	一四
結婚賛成	一九
処女も良し悪し	二四
飲む・打つ・買う	二九
ワイセツということ	三四
お金の貸し借り	三九
お客とお金	五二
好きで嫌いなお金	五七

損得の哲学

二六

出世とはどういうことか

二七

あるセイルズマンの教訓

二七

世間は馬鹿か利口か

二八

はて、さて

二八

逝く春や

二九

五十年夫婦

二九

二日酔いのなこうど

三〇

うかつにや死ねない

三〇

亭主の代りに

三〇

女房の爪の痛さ

三〇

貞淑冷血夫人

三二

コマネズミ夫人

一九

小判と木の葉

二〇

愛情というもの

二一

破壊衝動について

二二

まぼろしの母

二三

劣等感はなくせないか

二四

若い人の魅力

二五

半銭道人記

二六

ある先生の思い出

二七

われら馬鹿笑い黨員

二八

わが家の憲法

二九

「生きよう」と燃える炎

三〇

旅の心得

一六

貧書生身辺小間物談義

一七

芋づる検挙

一八

烏と箒

一九

到る処に変遷あり

二〇

頑固

二一

衣服雑感

二二

標準語

二三

一西洋人の能批評

二四

放送ゲスト出演

二五

できものより勝負を

二六

音楽のことあれこれ

二七

邯鄲夢の枕

二八

ある経験

三三

袖珍版・小説家論

三九

鷗外の歴史小説

三四

フロイトと私

三七

あとがき

四一

人生短期大学

女はワンピースである

文部省が道徳教育だというと、日教組の方はそんなことより例のすし詰め教室その他の、教育条件の改善がさきではないかという。つまり前者が、人間そのものの改善をという、後者は人間というものは、それが置き据えられる場所の条件によってどうにでも変って行くものだという考えでしょう。それで、前者のような考え方をする人たちを、かりに「主体派」と呼び、後者のそれを「条件派」と呼びましょう。

ところで女ごころというやつ、これはよく考えてみると、まさにこの女ごころというものこそ「主体派」的な解釈を許しもすれば、また同時に「条件派」的な解釈をも許す、まことに端倪すべからざるものではないかと思えますネ。などとはいうが、私は決して女ごころの諸事情に明るい人間じゃないし、その方面のことは研究はなはだ不充分で、どうもこんなことをいっていても大変うしろめたいんです。

友人二、三人と、あるところで杯を挙げていて、そのひとりがそこにいた女性に「どうだ、お

れと一寸浮気をしないか」といったら、くだんの女性曰く「結構よ。だけど末永くでなくちゃいやです」

このやりとりには一寸面白い問題があるなど私は思った。浮気というかぎりは一時の、かりそのものでしょう。それを「結構よ」と受けて、でも末永くときたのでは少しおかしい。末永い浮気というのは、丸い四角というようなもので、末永ければ、それはもう浮気ッというようなものじゃありませんまいし、浮気といえ、末短いということをもってその本領とする。色事は引き際が肝心だとは、世間の男たちがよくいうことですが、周囲を見渡すと、女性にちょっとちょっとかき出したために、永い間その女性につきまとわれて、どうにもあがきがつかなくなって困っている男性がこれでなかなか多いようだ。で、女のひとの方は、最初のほどは防備堅固で、どうしてなかなかなものだけれど、一旦城門を開くと、城中に入れた敵を一寸やそつとのことでは城外へ退却させない。あくまでも食い下がってくる。相撲でいえば、岩風とか若ノ海のようなものでしょうか。そして最後には男の方がケンケンの掛け投げかなんかをみんごと喰ってしまう。

そこでどうしても考えがセックスというものに及ぶわけですが、セックスというものは、そのはたらき方やあり方が、男と女とはちがうから、だから男は「浮気」ができるのに、女は「末永い浮気」でなければ困るということになるのでしょうか。さてここで「主体派」的解釈と「条件派」的解釈とが入り乱れるのです。「主体派」的立場からすれば、何しろ女のひとは生理学的に

いって妊娠ということもあり、男のように「浮気」はからだの面からいってできない。ところが男の方はある意味で無責任で「浮気」をしたがるし、またからだの構造が「浮気」ができるようになってゐる。つまり男の場合には、からだとところが、女の洋服でいえばセバレーツで、からだはからだ、こころはこころという工合に離ればなれにもなりうれば、また一つにもなりうる。上着の方をぬいじまうこともできれば、スカートをぬいじまうこともできる。

ところが女の方はからだとこころの關係がある時はくつついたり、またある時は別々になつたりするセバレーツのようじゃなくて、いわばワンピースなので、こころが行くところへは必ずからだも一緒にくつついて行くし、からだの赴くところには必ずこころも赴く。形影相伴うという關係があるんじゃないか、とまあこんな風に考えるわけでしょう。

一寸待ち給え、と条件派はいうのです。日本の女のひとがそうなつたのも元はといえば日本の社会の歴史や構造からなすだ。これまでの日本社会では、女がしいたげられ続けで、女ひとりでは、例外はむろんあるが、経済的に独立できないようになっていた。だから女は男に頼らざるをえず、女が男をひきつける最大の武器は何といつてもセックスだから、これを餌に男をひきつけ、その方面に与えるものをこんどは経済的な面で男から返してもらふということにならざるをえなかつたんじゃないか。だから社会の構造その他が變つて、女のひとと男と同じように経済的に独立できるようになれば「未永い浮気」などは不必要になるだろう。問題は女のひとのからだやこ

ころそのものにあるんじゃないか。からだやこころを外側から包んでいる社会的ないろいろの条件の方にあるんじゃないか。そういう条件が変わって行けば、結婚は就職だなんてこともなくなるだろう。結婚は就職だなんて、随分女のひとをばかにした話だよ、全く。すると「主体派」はいうでしょうネ、なるほど、そうなる。「末永い浮気」でなくともいいことになるんだな。

そうさ、と「条件派」は答えるでしょう。女のひとだって、男と同じように「浮気」ができるようになるのさ。

男と同じように、ネ、とって「主体派」は「条件派」の顔をじっと見ますネ、きつと。そして両派が一寸妙な顔をする。書き忘れましたが、この両派はともに男なんです。そしてこのふたりの男は、話がこんな形に落着いてしまったのを、一寸意外に思うといったような顔つきをするんだからおかしいじゃありませんか。

振り出しに戻りましょう。男というものはパートナーさえ変れば精力の衰退というようなことではない。女というものは、その道の職業人や特殊な人を除いては、単数の、特定のパートナーでなければ話が見つからない、とはよく世間でいうことのようにですが、果してどんなものでしょうか。

私は男で、男だから、逆立ちしたって女のひとの本当のところはわからない。また逆に女のひとにしたところが、女のひとには、たといとんぼ返りを打ったって、男の本当のところはわからないというもんじゃありませんまいか。しかし男女のセックス、性愛心理の相違は、からだからき

たものなのではないか、条件からきたものなのではないか。そこんところが私にはよくわからないんです。

男は女のアクセサリ

面白いものを首に巻きつけておいでですナ。寶石ですか。え？ トンモロコシの実ですか。はあ、トンモロコシの実を青く染めて、それを糸に通してこしらえた首飾りなんだナ。スエーデン土産ですか。考えたもンですネエ。

しかしまあこの節の女の方は、また随分といろんなものをからだにぶらさげたり、くっつけたりしますねエ。小うるさくないのかなあ。かんざし、髪かざり、イヤリング、首飾り、腕輪、指輪、それに年輩のひとだと御ていねいに高血圧を下げるのに効くという何とかバンドまではめるんだから、文明の手カセ足カセというところだナ。いや、本当ですよ、足首にまであの何とかバンドをはめてるひともいます。

まるで土人だな。夜、いよいよ寝るといふ時は大変な騒ぎでしょう、立ち会ったことはないが、からだ中からありとあらゆるアクセサリを外すのは一手間だろうナ。ついでにいかがです、われとわが頭を両手でつかんで、ぐるッとねじって、外しちまったら。いやそんな冗談もいたく